

「未来志向メッセージが日本人若年層の献血意図に及ぼす影響」

目的と問題

本研究の目的は、日本人若年層の献血意図を促すための手立てを検討することにある。現在、日本においては、少子高齢化等の影響により輸血用血液製剤や血漿分画製剤などに対する需要が高まる一方で、30代までの若年層の献血者数は減少の一途をたどっており（厚生労働省, 2023）、献血の安定供給が喫緊の課題として位置づけられている。事実、日本赤十字社（2022）が発表した献血者シミュレーションによれば、献血可能人口の減少などにより 2020 年から 2035 年までに延べ献血者数は 11.7% 減少し、2035 年度時点で 46 万人の延べ献血者数が不足することが予想されている。

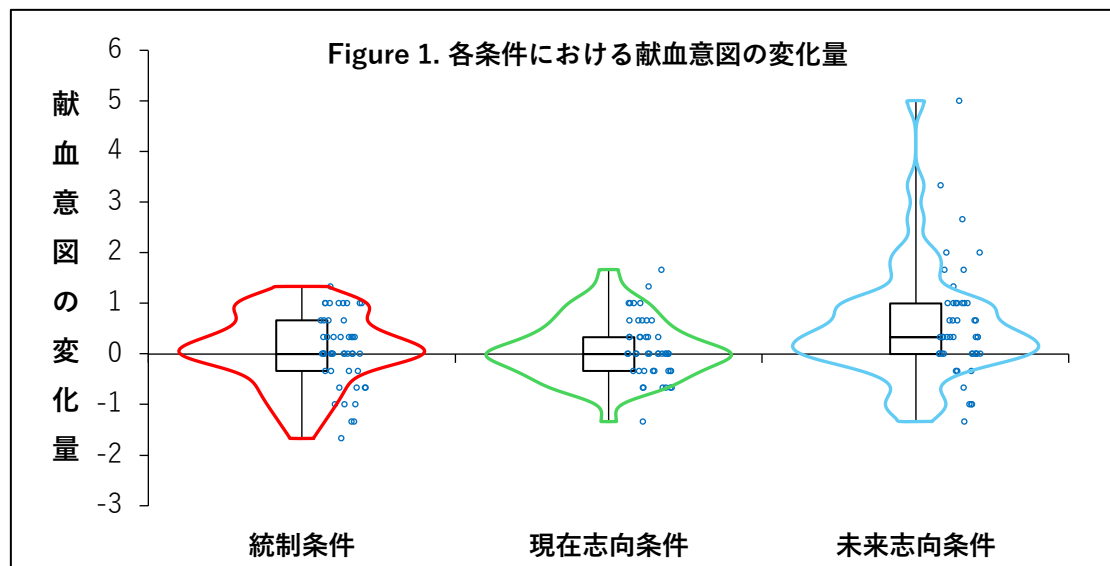
こうした現状に鑑みつつ、本研究では、献血に対する若年層の態度変容を導きうる要因として、**長期的な思考を促す利他的利己主義（未来志向性）**に着目する。Baumeister et al. (2018) の議論を踏まえると、「未来」とは、複数の起こりうるかもしれない可能性の束（マトリックス）であり、その意味において、未来に思いを馳せることは、近視眼的な便益に基づく意思決定を長期的な便益をも考慮する意思決定へとシフトさせる可能性を有している。この意味での未来に思いを馳せさせる操作を用いた先行研究においては、未来志向を促すメッセージを提示することが、人々に対して（短期的な視点に囚われるのではなく）より長期的な視点の重要性を認識させる可能性を示している（e.g., Vonasch & Sjøsted, 2021）。また、同様に未来に思いを馳せることの効果を検討した Hashimoto ら（2022）や Maeda ら（2021）の研究においては、長い目で見れば、参加者自身やその身近な人たちが社会福祉の恩恵を被る日が来る可能性があることを強調することにより、障害者の社会的包摂に関わる「ヘルプマーク制度」や「インクルーシブ教育制度」などに対する人々の態度をより寛容にする可能性が示されている。

上述したような未来志向性の効果に関する議論で検討されている「近視眼的な意思決定から長期的な視点に基づく意思決定へのシフト」は、社会的ジレンマに関する心理学研究で議論されてきた「利他的利己主義」（山岸, 1990）についての議論とも整合的である。献血の安定供給に関する状況を一種の社会的ジレンマ状況として捉えた場合、この状況下で人々の献血（協力行動）を引き出すためには、（短期的ではなく長期的な視点に立ったうえでの）自身の利益を明示することが重要となる。（これは、端的に言えば、表面上の協力性は利己的な目標達成の結果であってもよいというアプローチである。）本研究では、こうした利他的利己主義ないし未来志向性に関する議論を踏まえ、「長い目で見れば、あなた自身やあなたの家族が血液製剤や血漿分画製剤を必要とする可能性が十分に存在する」ことや「多くの人たちが献血を習慣的に行い、献血の安定供給がかなう社会状態を、いわば一種の“保険”としてつくっておくことは、あなた自身にとっても有益である」といったメッセージ（以下、未来志向メッセージ）を若年層に伝えることで、彼らの献血意図が高まるかどうかを二つの心理学的実験研究を通じて検討する。

研究 1

日本人大学生 68 名（男性 26 名、女性 42 名）を対象に 3 つの実験条件 —— 統制条件（ $n = 22$ ）、現在志向条件（ $n = 22$ ）、未来志向条件（ $n = 24$ ） —— にランダムに割りあてたうえで参加者の献血意図の条件差を調べるための実験を行った。実験に際して、実験への協力は任意であること、匿名性につ

いては十分に保証されていることを明示したのち、参加者にはまず質問紙を配布した。質問紙の冒頭では、上記の実験条件に沿った説明文が記載されていた。まず、統制条件に割りあてられた参加者には、献血に関して、「献血とは、健康な人が自らの血液を無償で提供するボランティア」であることのみが記された説明文を読むように求めた。現在志向条件に割りあてられた参加者には、統制条件の説明文に加え、「今現在、輸血を必要とする方々に安定的に血液を届けるためには、若い世代の方々の献血への協力が必要」であることなどが記された説明文を読むように求めた。この説明文は、「今・ここ」の近視眼的な視点から献血の重要性を促すことを意図していた。そして未来志向条件では、統制条件の説明文に加え、「長い目で見れば、あなた自身やあなたの家族の誰かが輸血を必要とする日が来るかもしれない」ことや「若い世代の方々の献血への協力は、現在、輸血を必要とする方々のみならず、あなたを含むすべての人たちの命を救うことにつながる」ことなどを付記し、長期的視点から捉える献血の当事者性を促すメッセージを参加者に読ませた。その後、条件にかかわらずすべての参加者は献血意図を測定する質問項目（3項目）を含む質問に回答した。献血意図の得点を従属変数、条件〔統制条件（ $M=4.97$ ）、現在志向条件（ $M=4.86$ ）、未来志向条件（ $M=5.85$ ）〕を独立変数とする分散分析を行った結果、条件の間には有意な差が確認された（ $F(2,65) = 4.93, p < .05, \eta^2 = .13$ ）。多重比較を行った結果、未来志向条件と統制条件の間（ $t(65) = 2.53, p < .05$ ）、そして未来志向条件と現在志向条件の間（ $t(65) = 2.84, p < .05$ ）にそれぞれ有意な差が確認された。しかし、統制条件と現在志向条件との間には有意差が確認されなかった（ $t(65) = 0.30, n.s.$ ）。研究1の結果は、未来志向メッセージの有効性を示すという意味で示唆に富む結果であるといえるが、献血意図の個人差を十分にコントロールできているわけではない。そこで研究2では、事前と事後の比較、つまり変化量を従属変数とし研究1の追試を行う。



研究 2

研究2の実験デザインは、研究1とほぼ同様である。日本人大学生142名（男性72名、女性69名、答えたくない1名）を対象とし、まず実験を実施する一週間前に参加者の献血意図を測定した。その翌週に参加者をランダムに3つの条件——統制条件（ $n=49$ ）、現在志向条件（ $n=46$ ）、未来志向条件（ $n=47$ ）——に割りあてた。分析に際しては、実験参加者が自ら作成したIDを用いるかたちで1週目と2週目で測定した献血意図の得点を紐づけ、2週目で測定した献血意図から1週目に測定した献血意図を差し引いた得点を献血意図の変化量とした。この変化量を従属変数、条件を独立変数とす

る分散分析の結果、研究 1 と同様に、条件差が確認された ($F(2, 139) = 5.34, p < .01, \eta^2 = .07$; Figure 1 を参照)。多重比較を行ったところ、統制条件と未来志向条件の間 ($t(139) = 2.94, p < .05$)、現在志向条件と未来志向条件の間 ($t(139) = 2.70, p < .05$) に有意差が示され、統制条件と現在志向条件との間には有意差は示されなかった ($t(139) = 0.19, n.s.$)。

総合考察

本研究で得られた結果は、未来志向メッセージが献血意図を促進するとする本研究の予測を支持するものであり、未来志向性と社会福祉にかかわるテーマを扱う先行研究 (Hashimoto et al., 2022; Maeda et al., 2021) の結果とも一貫するものである。また、操作チェック項目として尋ねていた献血の当事者性 (自分事) の感覚と献血意図との間には正の相関が示されていることも確認でき、長い目で見れば「献血が自分や家族を救うことにつながる」という認識枠組み (フレーム) が日本人若年層の献血意図を促す可能性は十分に考えることができる。ただし本研究では、献血意図を従属変数として設定している点に限界点があり、未来志向メッセージが実際の献血行動を促すことにもつながりうるのかどうかを検証することが今後の課題となる。今後は、学内献血等におけるフィールド実験を通じて、未来志向メッセージの効果を検討する予定である。

参考文献リスト

- Baumeister, R. F., Maranges, H. M., & Sjästad, H. (2018). Consciousness of the future as a matrix of maybe: Pragmatic prospection and the simulation of alternative possibilities. *Psychology of Consciousness: Theory, Research, and Practice*, 5(3), 223–238. <https://doi.org/10.1037/cns0000154>
- Hashimoto H, Maeda K and Sato K (2022) Future-oriented thinking promotes positive attitudes toward the “Help Mark” in Japan. *Front. Rehabil. Sci.* 3: 967033.doi: 10.3389/fresc.2022.967033
- 厚生労働省 (2023) 「令和 4 年度血液事業報告」.2023 年 6 月 13 日取得, https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_31826.html
- Maeda, K., Hashimoto, H. & Sato, K. Creating a positive perception toward inclusive education with future-oriented thinking. *BMC Res Notes* 14, 467 (2021). <https://doi.org/10.1186/s13104-021-05882-4>
- 日本赤十字社 (2022) 「新たな献血者シミュレーションについて—— 2035 年度を見据えて——」 2024 年 5 月 22 日取得, <https://www.mhlw.go.jp/content/11127000/001129981.pdf>
- 山岸 俊男 (1990) 「社会的ジレンマ —— 「自分 1 人ぐらいの心理」 の招くもの——」 サイエンス社